

みなしご^や弥^は八^ち

浜田けい子 作

阿部えり子 絵



913.6/みなしご^{やち}弥八
233 ページ・22 cm・A 5 判

作者について

大阪生まれ。明治大学文学部演劇学科卒業。日本児童文芸家協会，日本児童文学者協会，少年文芸作家クラブ会員。著書に、『太陽とつるぎの歌』『野をかける少年』『みやこは栄えても』『ローマにかけるゆめ——支倉常長』がある。

一九八〇年五月三〇日 第一刷発行

著 者 浜 田 け い 子

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二一八
電話 東京 二九一七六五一(営業)
二九四一六七二(編集)
振替 東京 六一四 一一二三

厚徳社印刷・矢島製本

© K. Hamada, printed in Japan 1980

8093-88034-4604

みなしご^や弥八^{はち}

浜田け

子作

阿部えり子
絵

筑摩書房

も

く

じ

序章 小さなまいご

7

1 しあわせな弥八やはち

32

2 キリシタンのお守りまも

53

3 仏師ぶっしの誇りほこ

75

4 美しいお菓子かし

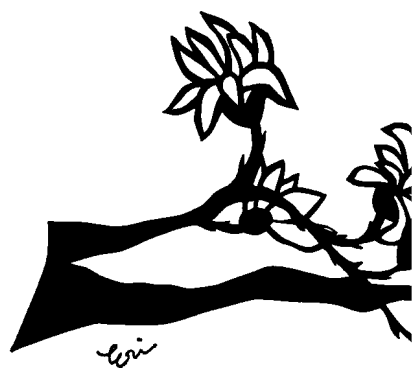
91

5 仏ほとけは常つねにいますけども

111



11	母に似た岩槻人形 いわたつき	212
10	日光東照宮へ にっこうとうしやうぐう	195
9	円童子の祈り まどかどうじ いの	180
8	伏見の泥人形 ふしみ どろ	164
7	風車のうた かざぐるま	146
6	子光の商売 しこう	129



序章 小さなまいご



そして、三日たちました。

なのに、お母さんは、まだ帰りません。

小さな弥八やほちは、目をさますと、すぐに、かぶっていたゴザを、はねのけました。もうすっかり、夜は明けていましたが、あたりは銀色ぎんいろのもやに、けぶっています。晴れた日なら、川のむこう、ま近くに見えるはずの東山ひがしやまも、清水きよみずの塔とうも見えません。目の前を流れる鴨川かもがわも、きょうは、鉛色なまりいろの波を立てているだけです。

弥八やほちは、しばらくの間、川上の方に見える橋はしをながめていましたが、急に、河原かわらを橋はしにむかってかけ出しました。いつも、お母さんが、その方角から帰って来るからです。

「お母さん」

弥八やほちは、走りながら、ペソをかいていました。すぐに行きつけると思ったのに、橋はしはなかなか近づ

いてくれません。おなかの虫は、ぐうぐう鳴くし、なにしろ、弥八は、まだ、五つになったばかりの子どもののです。

お母さんが小さな弥八の手を引いて、この鴨川の河原へやって来たのは、桜の花が散りかけたころでした。そして、河原の土手に住みついてから、それほど日がたっているわけではありません。でも、弥八はこの河原にすっかり慣れて、すぐひとりで遊べるようになりました。すると、お母さんは弥八を残して、ときどき、どこかへ出かけるようになりました。それでも、夕方には、きつと帰って来たり、そのときには、いつも、おいしい食べものを持って来てくれるのです。それで、弥八は、お母さんが出かけても、おとなしく遊んでいました。以前、丹波にいたときも弥八は、やっぱり、ひとり、るす番でした。お母さんは、たいていの日、よその家へやとわれて働きに出ていたのです。そして、お父さんは一度も、帰って来たことがありません。なぜなら、弥八がまだ赤ちゃんのころ、熱病にかかって、お墓の中へ入ってしまったからです。

鴨川の河原をかけながら、弥八は、ときどき立ち止まると、足もとの石を拾って、川へ投げつけました。石はあんまり遠くへ飛ばなくて、すぐ近くの水ぎわに、ぼとんと落ちてしまします。

でも、とうとう、橋にたどりつくことができました。弥八は河原の土手にはいあがると、橋の欄干のかけから、こっそりと、のぞいてみました。なんと、たくさんの人が、橋の上を歩いていることでしょう。ほんとに、おおぜいの人が、行ったり来たりしています。

弥八は、いつか泣きやんでいました。そして、サルまわしのおじさんのうしろについて歩いていき

ました。おじさんの打つ太鼓のたのしい音につられて、どこまでも、どこまでも、ついていきました。にぎやかな、人ごみの中、町かどをまがったり、まっすぐに行ったり……そんなふうにして、どのくらい歩いたでしょう。ふと気がつくと、サルまわしの姿も見えず、太鼓の音も聞こえません。それどころか、あたりは、ひっそりと人通りもありません。あっちを見ても、こっちを見ても、高い塀が小さな弥八を見おろしているばかり、あんなに、にぎやかに並んでいた店屋も、なくなっているではありませんか。

「花や、木の芽は、いりませんか」

花を頭にのせて、売り歩いているお婆さんの姿が、むこうに見えるだけです。弥八は、わーんと泣き出しました。花売りのお婆さんは、泣き声に気がつくと、ちょっと、ふりむきましたが、そのまま、知らない顔をして行ってしまいました。

ぼつんと、雨まで降ってきました。

「お母さーん」

弥八は、大声で泣きわめきながら、谷間のような塀ぞいの道を、夢中でかけ出しました。

「どうした坊や。なにを泣いている。泣きやまないと、天狗さんが、鞍間のお山から、おりてきなさるぞ」

そんな声がしたと思ったとたん、弥八のからだは、ふいに空中に浮きあがりしました。大きな腕に、かかえあげられたのです。でも、弥八は、手足をばたばたさせて、その手の中から、すりぬけようと、

けんめいにもがいて、いっそう、はげしくわめきたてました。

「こら。おまえは、男の子だろう」

弥八^やを抱きあげたまま、男の人は、すこしこまったような顔をして、あたりを見まわしました。それはお坊さん^{ぼく}のように黒い衣^{ころも}に身を包んだ年配の人でした。

「お母さんにしかられたのか。家はどこだ。おじさんが行って、いっしょにあやまってあげよう。さあ、そんなにあばれないで、静かにしなさい」

それでも、弥八^やはますます、声をはりあげ、

「お母さん」

と、泣きさけぶばかりです。

「そうか、そうか。わかった。急には、泣きやむことができないのだな。では、お母さんが呼びに来





るまで、しばらくここで、おじさんといっしょに待っていよう。あの四ツ辻がいい。あそこなら、お母さんが、どちらから来ても、すぐに、おまえを見つけることができるだろう」

男の人は、もう一度、しっかりと、弥八のからだを抱きなおすと優しくいきました。暖かく大きな胸です。暖かく大きな胸と腕に抱きかかえられているうちに、弥八はだんだんおとなしくなっていて、四ツ辻にいついたときには、もう寝息を立てていました。ときどき、まださっきの続きで、しゃくりあげながら眠っている弥八の小さな顔を見て、男の人は、

「子どもは神さん仏さんと、世の人はいうけれど、ほんとにそのとおりだと、にっこりしました。」

「しかし、おそいな。もう、さがしに来てもよいはずなのに……」

だんだん持ち重りがしてくる弥八をゆすりあげて、男の人は町かどを行ったり来たりしました。そこは人も通らず、道は四方とも塀に囲まれています。だれにたずねることもできず、男の人は熊のようになだ歩きました。その上、さっき、ぼつんと落ちてそれっきりになっていた雨が、いよいよ本降りになってきそうな気配です。ぼつぼつ梅雨が始まるうとしているこのごろのこと、いつ降り出すかわかりません。

「ひとまず、家につれて帰るよりほかあるまいな。ゆっくり眠って、目がさめれば、もうすこし、はつきりとしたこともいだろう」

男の人は、そう自分にいい聞かせると、弥八を抱いたまま、大またに歩き出しました。

その人の名は光源。仏像を造る人でした。すまいは六条堀川という所にあつて、ちょうど、この近くのお寺へ仏像の修理に出かけた帰り道だったのです。

光源は道すがら店屋に立ち寄つて、つきたての餅を買いました。それをふところに入れると、いまはぐつすりと思つてしまつてゐる弥八をゆすりあげ、いそぎ足になりました。とうとう雨が降つてきたのです。風をまじえた雨はしだいに大降りになり、ようやく家までたどりついたときは、光源の笠からしずくがたれ、着ている衣はびしょびしょにぬれていました。けれども、弥八は、まるで家の中の暖かい寢床にゐるように、すやすやと安らかな顔をしています。光源が、小さな弥八を雨から守つて、衣の袖の下にしっかりと抱いていたからでした。

「さあ、やっと帰つてきたぞ。ちょっと待つてくれ。今、あかりをつけるからな」

光源は、手さぐりでそつと弥八を上がり口におろしました。その家は、長屋の中の一軒で、板ぶき屋根も柱も、傾きかけてゐるような、みすばらしいものでした。

「おじさんは、ひとり住まいなのだからな。もう、泣くのはごめんにしてくれよ」

光源はぶつぶつひとりごとをいいながら、閉めたしとみ戸のすきまから、雨といっしょにもれてくる光をたよりに、棚の上の油ざらをおろすと火をつけました。

「たいへんな吹き降りだ。こいつはたまらん。家の中まで水びたしじゃないか」

それはすこし大げさないいかたでしたが、たしかに、しとみ戸と戸口のすきまから吹きこむ雨風で、

壁や土間がすこしぬれていました。

「つれて来たまではよいが、どうしたらよいか、さっぱりわからん」

光源は小さなあかりをたよりに、ぬれた衣をぬいで雨水をしぼり、笠といっしょに柱にかけてから、足をふいて、そと板の間にあがりました。それから、こざっぱりとした白い着物に着がえすると、もう一度土間におりて、かまどに火をつけました。朝から、茶釜に水をくんで用意がしてあったのです。ふいごで息を吹きこむと、火はすぐにいきおいよく燃えあがり、かまどの中をまっかに輝かせました。そして、枯れ枝がばちばちとはね、金のほのおのおどるさまを見ているうちに光源の心はすこし落ちつきました。男のひとりずまいの中へ、小さな男の子が思いもかけず、まいこんで来たのです。たとえ、今晚だけのことだとしても、いったいどのようにしてやればよいかさっぱりわからず、とほうにくれ、心細くさえなっていたのでした。

やがて茶釜の湯がしゅんしゅんわいてくると、光源も、ちょっと気分が楽になりました。

『雨が小降りになったら、やっぱり、となりのお里さんに相談してみよう』

かまどから、ニカワを煮る火桶に、火を移し、あみをかけました。さっき買ってきた餅を焼くためです。

やがて、餅が焼けると、光源は、おそろおそろ弥八をゆり起こしました。

「坊や、餅が焼けたぞ。おじさんは、もう腹がぺこぺこだ。起きないと、みんな食べてしまうぞ」
弥八は、ぐっすり眠ったおかげか、むずかりもしないで目をさまし、きょんとしました。でもま

つくらな中に、小さなあかりがともり、知らない男の人が、目の前にいるのを見て、泣き出そうとしました。光源はあわてて、

「お餅だぞ」

と、一つとりあげると、ふうふう吹いて、さもおいしそうに、自分の口にほうりこみました。また泣き出されるのをおそれて、思わず道化て見せたのです。ふだん、無口できびしい顔つきをした、この大男の光源を知っている人が見たら、腰をぬかすようなことを光源は、それとは知らずやっているのでした。

はじめは、怖れていた弥八も、こうばしい餅のかおりにつられて、思わず手を出しました。

「さあさあ、あわてないで。やけどをするじゃないか。おじさんが、じょうずに、とってあげるからな」

弥八は、ものもいわず、三つも、ぺろりと餅を平らげ、まだ欲しそうなようすです。

「みんなおまえのものだ。あわてず、ゆっくり食べなさい、のどがつまるぞ」

光源は、湯を吹いてさますと、弥八にあたえ、

「おじさんの名まえは光源という。四十一歳だ。坊やは何という名だね。年はいくつだ」

と、問いかけました。今は、すっかり満腹して、きげんのよくなった弥八は、

「あたい、弥八ちゃん。これだけだよ」

と、かわいらしい手をぱっと、ひろげて見せました。